

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 1 3 号

2020年1月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より (13)

第 14 講 私の信仰および忘れ得ぬ内村先生のお言葉

私の生活目標

忘れ得ぬ内村先生のお言葉についてお話しする前に、大変いい機会ですから、私の現在の信仰の話をするのを許していただきたい。私の生活の目標を申し上げます。

生きらば称名、このままで、目の前のなすべきことをなし、願いあれば御名によって祈る。毎日会う人と毎日頂く食物とに感謝したい。死ねば天国、キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん。しかして、すべては賜物であるから生きるも死ぬるも喜ぶたい。

以上、私の生活目標であります。「生きらば称名」、称名というのは、わが主イエスよとイエスの名を呼ぶこと、「生きらば称名、このままで」、このままで称名する、汚い心そのまま。目の前のなすべきをなし」と。目の前のなすべきをなすのですから、自分の力相応

になす、分相応になす。目の前のなすべき事をなし、「願いあらばキリストの御名によって祈る」。例えば私は今朝でも、朝起きにくかったら「神様、起きる力を与えてください。イエス・キリストの御名によって祈ります」と言って祈る。「願いあらばキリストの御名によって祈る」。これは大変大切であります。皆さんもご実行になったらよろしい。それから毎日会う人と、それから毎日頂く食物に対して感謝したい。死ねば天国キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん。しかして、すべては賜物でありますから生きるも死ぬるも喜びたい。喜ぶ力がありませんから、神様、生きるも死ぬるも喜ぶようにして下さい、お願い致しますと祈る。祈ったらよろしい。

朝夕の私の祈り

朝夕の私の祈り。

朝起きた時の祈り。

「主イエスと十声称えて目を覚まし、御名を称えて今日も歩まん。

願いあらばキリストの名によって祈る」

夕、床に就く時の祈り。

「主イエスと十声称えてまどろまん、長き眠りになりもこそすれ。」

そして夕、床に就く時の祈りには、その日にお目にかかった人々、

そしてその日に頂いた食物のことを感謝する。そういうふうには、お

目にかかった人びとの名前を挙げて、「この人々と一緒に天国へ迎え

てください。イエス・キリストの御名によってお願い致します」と

言って祈る。今晚寝る時には、皆さんの名前を挙げまして、「この方

と一緒に天国へ迎えってください。イエス・キリストの御名によって

祈ります」と言って今晚祈りますから、どうぞご署名、帰る時に名

前を書いて帰って下さい。

現在の心境

現在の心境、現在どんな心境か。このままで称名して目の前のなすべきを分相応になしておりますから、心身安楽なり。心身、心も身も安楽です。易い。善い行ないをしたいという希望はない。称名して自分の目の前のことをなす、分相応になす以上に良いことはない。そうですから善いことはしたくない。また、善い信仰がほしくない。称名に勝る信仰なきが故に。これから健康、健康と、強い体は欲しくない。称名して、主イエスよと称えて、神に守られているごとき素晴らしい健康はない。そうですから健康は欲しくありません。現在の心境。明日への望み。

われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん、御名によって祈りて

われだにも、まず天国に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん、キリストの名によって祈りて

私の伝道は、死にまして天国へキリストによって迎えられて、キリストに直接的にご指導を得て、パウロ先生ご自身によって指導してもらって、私の地上に残っておる同信の人々をもって私の伝道は開始する。大体これが私の現在の心境であります。

忘れ得ぬ内村先生のお言葉

只今、内村先生の愛唱讚美歌を皆さんに歌って頂きましたが、幸い私は学生時代、高等学校、大学の大体6年間、毎日曜内村先生の講義を聴くことが出来た。特に大正10年と11年には2年にわたってロマ書の講義を聴くことができた。先生が御年60の時に、私たちが先生の講義を聴いたほとんど最後と言ってもいい。6年間先生の先生の講義を聴けたというのは、私たちが最後だ。

先生がこの歌を非常によくお歌いになった。きょう聴いておりましたら、先生のお姿、壇上にお立ちになっているお姿をそのままを思い出す。先生はちゃんとフロックコートを着ておられまして、ご講義になりました。

先生から聞きました、耳に残っている忘れ得ぬ言葉を5つ申しあげます。

神の義は、律法、道徳、宗教とは無関係

第1は、ロマ書3章21節から24節まで、特に21節の「神の義が、律法の他に現われた」という講義、これはいつも申し上げるとおり、大正10年5月15日、神が我々を義としたもうその「神の義」、——神の救いと言っても「永遠の命の賜物」と言っても同じことですが、——これは「律法のほかに」という言葉を、先生は「律法、道徳、宗教と無関係に現われた」と言われた。

この講義で私は救いの意味が分かった。すなわち人間側の、人間の持っている道徳とか宗教とか、あるいは心の状態、行ないの状態、そういうものに全然よらずに、我々の持っている律法、道徳、宗教と無関係に、神の方から、すべては神の方からくださった。すなわち、私がいつも申し上げている、我々の信仰とか行ないとかというものとは関係なしに、向こうから賜物としてくださったということがはっきり分かった。これはいつも申し上げていることでもありますから、耳がタコになっていますからこれくらいにしておきます。

十字架の主を仰ぎ見る

第2番目。内村先生はこれもたびたび申し上げているのですが、「自分のキリスト教は十字架の主を仰ぎ見る、復活の主を仰ぎ見る、再臨の主を仰ぎ見る、仰ぎ見るということに尽きる」。『ロマ書の研究』の本にも、「自分の宗教は主を仰ぎ見ることである」ということをおっしゃっている。

先生が亡くなられる昭和5年の3月に弟子が訪ねた時に、弟子が先生に「先生の信仰を一言で教えてください」と、先生の病気は重いから、もう先生は亡くなるでしょうから一言で言ってくれと言った時に、内村先生は「主を仰ぎ見よ」と言われた。これは、本日読んでいただきましたヨハネ伝3章14節、15節に、「主を仰ぎ見る者は永遠の命を得る」とありますが、この「仰ぎ見よ」という先生のお言葉を、先生の亡くなる日に訪ねた弟子もその意味を理解しなかった。内村先生は数え年で70歳でお亡くなりになりましたが、もう10年生きて頂いたら、この「仰ぎ見よ」と先生がおっしゃった意義をはっきり先生が弟子たちにご説明になっただろうと思います。ところが先生は70にして亡くなられて、その深い意義を後から来る者に譲った。自分自身ではその意味をはっきり説明なさらなかった。

仰ぎ見るという行動

ヨハネ伝 3 章 14 節、15 節は、十字架にかかったイエス様を仰ぎ見たならば救われる、永遠の生命をいただくとあってイエス・キリストを仰ぎ見るということは、「仰ぎ見る」という行動でありますけれども、この仰ぎ見るという行動に、イエス・キリストの贖い、十字架の贖いの力を信ずる信仰が含まれている。「仰ぎ見る」という行動ですけれどもこの内に、イエス・キリストを神の子と信じ、イエス・キリストの贖いを信ずるという信仰が含まれている。こういうことを詳しく先生はご説明にならずに、これを後から来る者に譲って亡くなられた。私はやはり、先生ご自身にこのことを説明してもらいたいと思います。どうぞ諸君も長生きをして、深い真理を悟るようにお勧めします。

死ぬときに役に立つ聖書の言葉

第3、内村先生は、この十字架の贖い、我々の行ない、我々の信仰、我々の道徳、我々の宗教に無関係に、神の方から救いが現れている、これを贖いという。この贖いを日本において、また世界において、最も明瞭にとは言いませんけれども、最も明瞭な一つとして説明されたのは内村鑑三。内村鑑三の日本民族、世界人類に対する貢献はここにある。贖い。ロマ書3章21節から26節までの本当の意味を説明したのは内村鑑三。内村鑑三が言うのに「この十字架の贖いは、君らはまだわからない」。今聴いていても分からない、分からんでもよろしい。死ぬまで覚えておれ。死ぬ時に役に立って、死の波河を渡る時にこれが役に立つと内村鑑三は言った。これが忘れ得ぬ言葉の三つ目。

1人の信者ができたら日本は変わる

4つ目。先生の言葉に「日本に一人の信者が出来たら日本は変わる」と言われた。本当に、日本に一人の信者が出来たら日本は変わる、と言われた。

私は蓮如上人の言葉を思い出す。蓮如上人が「当流の繁盛というのは、大勢の人が集まることでなくして、1人の人が信を取ること、これが当流の繁盛だ」と言われた。また伝教大師は、「一隅を照らす人が、すなわちこれが国法だ」と言われた。私は内村鑑三が、1人の信者が出来たら日本は変わるとおっしゃった当時は、これはちょっとオーバーだと思っておりました。しかしこの頃は真理であることを知る。一部分というものは大切です。部分は全体を表す。内村鑑三は、またレンブラントは1人で絵を書いてオランダの国を永遠の国としたと言った。「我はまた、1人の牧師も、一つの部屋で聖書を勉強して万世を教えることができる」と言った。それが4つ目。

キリスト教のうちに、仏教、儒教、神道の粹

5つ目、最後。「キリスト教は神の教えであり、キリスト教の内には仏教の粹も、儒教の粹も、日本の神道の粹も全部、真なるものの粹はキリスト教の内に含まれている」と言った。

私は、マルタとマリアに対するイエス・キリストのお言葉を思い出す。「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことで心が乱れている」「必要なことは多くはないんだ」「一つである」と言われた。真にキリスト教の中心、キリスト教の最高の中心は一つであるならば、その一つに均一しているに違いない。仏教で儒教でも神道でも何でも。私はこの頃、仏教浄土門とキリスト教とは一つに見える。そうですから、無理にキリスト教だけやる必要はない。キリスト教をやりながら仏教をやりたまえ。仏教浄土門を勉強したらよろしい。どれでも自分の好きなものをやったらよろしい。私はこの頃一つに見える。ピタッと一つに見える。

弟子は先生の言っていないことが言える

そういうわけで、内村先生の教えで私が覚えていることを5つ申しあげました。「弟子は師に勝らず」という言葉がありますが、最後に師弟の関係についてちょっと申し上げたい。

それは同じ真理を受けても本当の弟子だったら、先生の言っていないことが言える。例えば、親鸞は法然の弟子です。師・法然から親鸞は、法然の信仰を学んだ。学んだけれども、師法然の言わなかったことを言った。例えば一つの例を言えば、師匠の法然は「悪人往生す。いわんや善人をや」と言った。師匠は、法然は。そうしたら、弟子の親鸞はその言葉をひっくり返して、「善人往生す。いわんや悪人をや」とこう言った。弟子の親鸞はひっくり返した。同じ信仰を言い表すのに、弟子は師匠をひっくり返して言っている。こういうことが弟子になったら出来る。本当に先生の心が分かった人は、先生の心を言える。すなわち、救いの力が万人に及んでいる、万人が救われるんだということが分かった時にそういうことが言えた。

親鸞は妻帯をした

弟子の親鸞は法然がしなかった妻帯をした。当時は妻帯と言った
ら墮落です。滅びです。そういう墮落を、師匠はしなかった墮落を、
弟子の親鸞は妻帯をした。

そういうわけで、本当に師匠の信仰が分かったら、みんな
ndividuarity 個性が一人一人違うんだから、そうですから先生と違
う光が出てくる。

これについても語りたいことが多いですけれども、また色々話す
機会があるでしょう。以上、内村先生の 50 回忌の記念説教としてこ
れをもって終わりたいと思います。